林政ジャーナル

No.14
1996年4月30日
発行所
日本林政ジャーナルの会
〒162 新宿区市ヶ谷本村町3-26
ホワイトレヂデンス
TEL 03-3269-3911
FAX 03-3268-5261

第18回定期総会報告

第18回定期総会は、2月19日、東京・内幸町のプレスセンターで開催し、1995年度活動報告、同収支決算及び監査報告、1996年度活動計画、同収支予算、役員改選を審議し、原案どおり承認されました。

今年度は、昨年度に引き続き、「どうする日本の森林」を年間テーマに多角的な視点から研究会活動等を行うほか、秋頃に共同取材を実施。また、会報『林政ジャーナル』の発行回数を増やし、会員相互の情報交換等を活発化させることとしました。

役員改選では、会長に中西實（元共同通信論説副委員長、再任）、副会長に高田浩一（朝日新聞、再任）、成田利典（林業新聞、新任）、事務局長に辻潔（日本林業調査会、新任）、監事に森田稲子（第一プランニングセンター、新任）、石井健雄（日本緑化センター、新任）を、それぞれ選出しました。なお、幹事の中から、赤堀楠雄（林材新聞、新任、会計担当）、石山幸男（日刊木材新聞、再任、研究会等企画担当）、上松寛茂（共同通信、再任）、児玉洋子（日本農業新聞、再任、研究会等企画担当）、深野久（共同通信、再任）の各氏を常任幹事に選出、本会の運営等について協議していくこととしました。

総会終了後、北村昌美・山形大学名誉教授から「森林と日本人」のテーマで特別講演をいただき、その後、入澤長官ほか林野庁幹部、角道農林中金理事長、甕地方競馬全国協会会長らを囲んで懇親会を行いました。（総会で承認された議案書は、同封してあります。）

森林・林業の「大切さ」を広めよう

会長　中西　實

林業経営の利益率がとうとう1％を割ったとか、林野庁の職員1万人体制で合意したという話を聞きました。民有林、国有林を問わず、林業をめぐる環境はますます厳しくなっています。

しかし、そんな中で必死になって林業経営を続け、森林を育てている人たちが全国にたくさんい

ることを、私たちは共同取材を通じて知りました。「海を育てるのは山だ」と知った漁民が山に植林に行く運動が、全国的に広がっています。

昨年11月（平成７年）の研究会でうかがった泉忠義・泉林業社長の北欧視察談に、私は深い感銘を受けました。確かフィンランドだったと思いますが、「一番尊敬される仕事は何か」という質問に、現地の人は「砕氷船の乗組員」に続いて「林業で働く人」と答えたそうです。仕事の厳しさが広く知られているからこそ、北欧では尊敬されているのでしょう。こんな話をある私立大で講義したら、若い学生はもうびっくりしていました。

この日本ではどうでしょうか。建設・土木などと並んで、３K職場の一つとされてきた林業に、いったん都会に出た若者がUターンして就職している話を、全国のあちこちで聞きます。おいしい空気と緑の中で働く林業のよさが、見直されているのでしょう。林業は決して３K労働ではありません。

日本列島という緑豊かな国土はなくなりません。つぶれるはずがありません。「３兆円の赤字が何だ」と内心思います。もっともっと国費を森林・林業に注ぎ込むべきだと思います。そのために私たちは、森林・林業の「大切さ」を人々、とりわけ若い人たちに教え広めていく責任があると考えます。

先の総会で役員、執行部の一部入れ替えをしました。会員全員で会を守り立てて行きましょう。ご諸兄のご協力をお願いします。

事務局から

事務局長の交代に伴い、本会の事務局を移転いたしました。本会の運営に関するお問い合わせなどは、下記までお願いいたします。

なお、事務局では、本会の研究会のテーマや講師などについて、会員のみなさまからのご要望、ご意見をお待ちしております。事務局まで、郵送またはFAXでお知らせくださるようお願いいたします。

・事務局の新住所等

〒162　東京都新宿区市ヶ谷本村町３－26　ホワイトレヂデンス４階

TEL　03-3269-3911　FAX　03-3268-5261

森林と日本人

山形大学名誉教授　北村　昌美

森林と日本人、そして森林文化をめぐって……

ただ今ご紹介ございました、山形大学におりました北村でございます。もう辞めてから四年ぐらいになるんですが、本日はお招きいただきましてありがとうございます。

お礼を申し上げようと思ってはおるのですけれども、しかし先達てからちょっと緊張しております。今回は他のところで話をするのとは若干違う感じがしています。これはいらん話をいたしますけれども、林政と名が付くと、私ども同業者の中では林政の専攻の連中が一番弁が立ちまして、大体言いまくられるわけです。それが一つ。

もう一つは記者の方々というのは、白神山地なんかに関係しております関係で記者会見などをやりますと、ギューギューやられましてですね、こういう恐ろしい人種とは付き合いたくないと思っていたところへお話があったものですから、どうしようかなと思ったんですが、私の本の名前を持ち出されましたんで、これはまあお断りするわけにいかないなということで参上したわけです。

今日はテーマといっても特別ないんですが、やはり『森林と日本人』というような題で一応格好をつけたほうがいいんではないかと思います。というのはご承知のとおり先達て出しましたこの『森林と日本人』という本は、最近、私がまとめたものであります。ここに全生命を打ち込んだわけではないんですが、かなりなエネルギーを費やしたという記憶がありますので、それについてお話したいと思います。

それからもう一つ、発行は2月29日ですから、まだ出てないんですが、『日本文化としての森林』というのを、信州大学の菅原さんの定年退官を記念して私どもが集まってつくりました。書名としては「森林」という題ですが、それを修飾する形で「日本文化としての」というふうな名前になっています。その中で全国13の森林を取上げまして、それぞれについて解説しているわけです。何が文化かと言われますと、それはわからないですけれども、要するに森林の事例をつないでいく間に文化というものの形が見えてくるだろうというのが私どもの考えであります。

これについてはかなり胸を張って言う必要もあるし、言えると思うんですが、つまり森林文化というような概念を先につくっておいて、それに見合うような森林を選ぶということは、実はできないんじゃないかと思います。というのは森林文化という概念は目下出来上がっていく過程にあるわけでして、逆に実例をいろいろと集めていくことによって、その中から森林文化というものが見えてくるというのが本来の姿ではないかというのが、私どもの一貫した考えであります。従いまして

一般的に言えば学問というものの系列からは離れるかもしれないと思います。

私どもの先達には例のサル学というのがありまして、あれは森毅さんの話によれば、学問として誰も認めていなかった、それが最近になってやっと市民権を得たというようなことを言っています。まさにそのとおりで、好奇心の塊でいろいろなことを観察している間に体系が出来上がっていったという非常に適切な例でないかと思います。初めにサル学があって、その中でみなが分担してやったわけではありません。私の森林文化というものも、おそらくそういうことだろうというふうに思います。

したがって、今仮に定義をしてみましても、その定義が人によっていろいろと違ってくるわけです。それは違って当然で別にそのことを咎め立てすることはないと思います。

以上が前置きでございまして、『森林と日本人』というこの本と、それから、ただ今ご紹介しました『日本文化としての森林』、これは地人書館から出ています。それと両方合わせたかっこうで、私の考えていることをお話したいと思います。

日本人がいるから日本の森林ができる

『日本文化としての森林』の中で、私は「出羽三山の森林」と、それから全く思いがけぬことで山伏の修行というか、私自身は修行はしませんが、勉強させられたんです。もう一つは「庄内の海岸林」というのをやっています。私の分担は、その二つということでありますが、私にとっては「出羽三山の森林」から教えられることがたくさんございました。これはあとで付け加えさせていただきたいと思います。

さて、今日の話は簡単に言いますと、なぜ日本には日本の森林があるかということに尽きると思うんです。日本にあるから日本の森林なんで、そのことをとやかく言うつもりはありませんが、これはこういうことを言いたいわけですね、つまり、仮にドイツ人ならドイツ人が日本全土に充満した、充満したというのはおかしいんですが、日本人とドイツ人を仮に入れ換えたといたしますと、もう日本の自然景観は一変するだろうということですね。これはそういう極端な例を出すと大体わかっていただけるんですが、日本人がいるからこそ日本の森林があるということを今まであんまり意識しないで、細かい事柄ばかり取り上げてきたというような感じがして仕方がありません。日本人がいるから日本の森林ができるんです。

これを実感したのは、いつも私が引き合いに出しますヨーロッパの例ですけれども、ライン河を挟んで、一方にドイツがあって一方にフランスがあって、はからずも私がそこのフライブルグという町に2年ほどいたもんですから、対岸のフランスの山地、これはヴォージュですけれども、それをのぞみまして、そこに行くとドイツと全く違う森林が展開している。そのことが大変な衝撃でありまして、そこに私が今のようなことを考えた元があるわけです。もともとドイツのシュワルツヴァルトとフランスのヴォージュは一続きの山だったわけですから、自然条件からいえばほとんど同じだと、もちろんこれは同じだと言い切ることはできないんですが、ほとんど同じ地域にあるわ

けですから、両者はほとんど同じであるということです。それがライン河が陥没したために二つに分かれまして、その結果としてフランスとドイツに分断されたわけです。それが今どういう状況かといいますと、フランスに行くとこれはフランスの森林なわけです。ドイツに行くとドイツの森林です。同じように境を接していますスイスに行きますと、これまたスイスの森林であって、それ以外のなにものでもない。あのようないい場所に私がはからずも2年もおれたというのは、まことに幸いであったというふうに思います。ああいうところに行かなければやっぱり気づかなかったろうというようなことを感じました。

というのは日本の林学の講義はもっぱら自然科学的、自然条件に重点を置きまして、ドイツの自然は緯度がこれこれで、平均気温がこうこうで、それから降雨量が云々というようなことで、もっぱら自然条件の結果として森林が生まれるということばかりを習ってまいりまして、それが自然科学だというような受け取り方をしてきたわけです。しかし一番大事なのは、そうじゃなくてそこに住んでいる人間ではないかということに気づかせられたということであります。

それじゃ、人間がいればどうして違うかというと、人間が意識を持っているから、それがあるまとまりを持ちますと国民性ということになります。ですから私がドイツ、フランスを見て、その結果得られた教訓をもとにしまして、着手しましたのは、じゃ日本人の国民性というのはどういうものだろうかと、こういうことです。国民性そのものにつきましてはご承知のとおり統計数理研究所が林知己夫先生を首班にして、もう長年研究をしておられます。そちらの膨大な研究がありますけれども、実はその林先生なんかとも連絡をして、勉強しながら自然観そのものに絞って国民性を若干追求してきたと、こういうわけです。

日本人の自然観――三つの特徴

ところで、日本人の自然観というのはどういうふうに今まで認識されているかということから始めたいと思います。われわれが調べました結果はちょっと置きまして、そもそも日本人の自然観というのは、これは非常に哲学的な課題ですから、まあ人によってものすごい難しいことを書いていらっしゃいます。最近も伊東俊太郎さんをグループの大将とした『日本人の自然観』という表題でずーっと年代を追って記述を展開しているというのがあります。いろいろな説明を加えればきりがないんですが、私は大体日本人の自然観は三つぐらいに絞っていいんじゃないかというふうに思っているわけです。

その一つは何かといいますと、これは自然に対する非常に繊細な感受性に富んでおるということ、これが一つ。もう一つは自然との間に緊密な一体感があるということ、これは人によれば親和的一体感というような表現をしておりますが、これが二番目。三番目が自然というものは自然になるものであって、誰かがつくったというものではないというのが日本人の自然観です。ヨーロッパと対比しますと、非常によくわかるんですが、ヨーロッパの場合は大体神様がそれをおつくりになったと、神の創造したもうたものが自然であるということですが、日本ではそうでなくて、じわじわっ

と出来上がってきたものだと、よく物がわくというようなことをいいますけれども、あれは非科学的と言えばまさに非科学的ですが、蛆がわいたとか、ああいうふうな感じですね、もう自然に出来上がってきたものだと、自然になったものだというような考え方であります。そもそもそういうことですから、日本の場合は自然というものを客観視するというか、それを認識の対象とする考え方がありませんでした。大野晋先生の話によれば、大和言葉には自然に相当するものがないというわけです。つまり名詞としての自然がなかった。自然というのは自ずからそうなるという、そういう意味に過ぎなかった。過ぎなかったというのはおかしいんですが、それが主であったというふうにおっしゃっていますが、まさにそういう状態だったと思います。

したがって、柴田敏隆さんによりますと、自然の反対語は何かというと勉強だそうです。答えを先に言ってしまうと面白くないんですが、まあその辺の一般市民の方を対象にする時は、ちょっと気を持たせたりするんですが、もう私はあんまりそういう話をし過ぎたんで先に答えを申しますと、自然の反対語は勉強だとこういうことです。関西の商人なんかが「勉強しておきまっせ」というのは。何言うとるんやろと、私も関西ですから、よくわかるんですが、あれはおまけするということは絶対できないけれども、あなただから無理に曲げて、できないことをするんですよというのが「勉強しておきまっせ」とこういう表現だと、こういうふうに考えると非常によくわかります。そういうふうに自然というもののとらえ方が日本ではとらえようにも何にも、それを認識の対象と思ってなかったわけですから、だから一体感も生まれるし、自然にわいたという、そういう考え方もできるということです。

おとついあたりでしたか、「おとつい」というのは関西の方言で秋田、山形では「おっとい」とかいうんですが、羽田空港に行きますと、ものすごく素晴らしい言葉がありました。「自然と暮らす」というのに並んで、「自然に暮らす」という文字が書いてあるんです。自然と暮らす、自然に暮らす。まあなんのコマーシャルか全然わかりません。わかりませんが、それを書いた人もおそらく、今のような自然というものに対する深い意味を込めて書いたんではないと思うんですけれども、今私が申し上げたことを極めて端的に現しております。「自然と暮らす」という時は自然が名詞なわけです。「自然に暮らす」というのは、これは自然はおそらく副詞ということになると思います。そういうふうな後者のとらえ方が日本では一般的だったと、こういうことであります。

近代科学の導入で自然観が変わってきた

今私がお話申し上げました三つの特徴というのは、まあなるほど日本人はそうだなというふうに心の中で頷かれる人が多いんじゃないかと思います。ところが私どもが調査をいたしますと、あにはからんや今はそういうことは言えない、もう日本人の三つの特徴というのは、ほとんど失われかけている。第一番目の繊細な感受性というのは、これは私は否定をいたしません。しかし、自然との親和的一体感というものが今あるかというとないわけですね。これは私どもが調査した結果からも非常にはっきりしておりまして、今までそれは日本人の特徴と思われてきましたけれども、実は

すでに失われているというのが今の状況でないかというふうに私は思っているわけです。

なぜそうなったか。この辺はこの『森林と日本人』の中にも書いています。こういう本が売れるとは思わないでいるんですが、なぜ売れないかというと、これは4,800円という定価にあります。これは、やっぱりかなりまなじりを決して、場合によっては家庭で相談をしましてですね、あんたそんな本買うて何するんやと、こう言われてですね、そういうことですから、私はそう売れるということは期待していないんですが……。しかし、上京して三省堂あたりに出かけますと、積んであるんです、あそこには、不思議に。冊数を勘定しまして、何回行っても、同じ冊数なんで（笑）、それで自分に言い聞かせて、いやこれは売れたやつを次々に補充するからコンスタントにあるんだと、こう言い聞かしているんですけれども、大体まあ売れないんじゃないかなという感じはしています。しかし、それは中身と関係ある面もあるし、ない面もありますが、実は今のようなことをごたごたっと書いているわけです。

というのは、明治の初めに近代科学が導入された時に、自然を名詞として、認識の対象として見るということが初めてそこで定着したわけです。日本人にとっては思いもよらんことだったわけです。今までの自分と一緒やと思っとったものが、お前と自然は別やでぇと、こう言われたわけですね。まあそれは赤ん坊が乳離れする時とか、そういうようなことに似ているんじゃないかというふうに思います。愕然としましてですね、自然というのは自分とは別やったんかというわけですね。それまでは自然の痛みは自分の痛み、それから自分の苦しみや楽しみは自然の楽しみというふうな関係が成り立っておったわけです。霊長類のあの河合雅雄先生の話によれば、19世紀までに日本人は文明国でありながら、それまでに絶滅させた動物は一つもないというんですね。河合先生がそう言うことですから、まず間違いないと思うんですが、19世紀までは何しろもう絶滅させるも何も、自分の仲間ですから、自然は身体の一部ですから、そんなことはしなかった。それが何時そういうことが起こったかというと、近代科学が導入されてから起こったと、こういうわけです。

近代科学と一緒に西欧の思想が入りましたね。これはもう私がこういうところで偉そうに言うまでもなく、ご承知のことをお話申し上げているわけですけれども、もう一回私がそれを綴り直しているだけの話ですが、そのヨーロッパの連中は全部が全部とはいいませんけれども、たとえばデカルトさんが「人間は自然の主にして、支配者となる」というようなことを言っています。言っているというのは、そういうことを書いている人のものを私が読んだだけで、直接デカルトさんと話したわけでもなんでもないんですけれども、そういう思想が漲っている。ですから、自然を自分とは別個のものとして認めるだけでなくて、それを下に置いていますね。その下に置くということの根底にはやはり神様がおつくりになったということがありまして、上に神様がいらっしゃって、その次に人間がいて、その人間のために自然があると、こういうふうな位置づけが成り立っておったわけです。

ですから日本で自然科学の導入とともに、自然は認識の対象だということだけでなくて、自分の下であるかのごとき錯覚を同時に入れたということであります。それ以後鉄砲の発達とか、いろい

ろなことがありますけれども、絶滅する動物の種が出てきたと、こういうことであろうかと思います。

自然を知らない年齢層ができている

それからもう一つ私の解釈ですけれども、頭の中で考える自然というものがそういうふうにある地位を得たと同時に、人間の生活が自然離れをいたしました。人間の自然離れというのはまだまだ戦前までは大したことはなかったと思いますが、特に戦後になりましてから自然離れをしまして、全く自然と接触するということをしらない年齢層というのができています。

この間、信州大学の菅原氏の停年の講演を応援を兼ねて聞きに行ったんですが、彼の説によると、日本人は55歳以上と55歳以下では自然観が違うと、申し訳ないんですが55歳以上でないと人間でないような言い方をしていました（笑）。それから下のほうは35歳、これを境にしましてですね、それ以下とそれ以上は違う。そうするとここにもいらっしゃると思うんで、あんまり気に触らないでいただきたいんですが、35歳から55歳の間がどうしようもないと、こういう話しですね。35歳以下はまた別個の自然観が生まれている。これはたとえば将棋の羽生名人、七冠王というのはよくわかりませんが、あれなんか見てもわかりますね、将棋というのは刻苦勉励して、その刻苦勉励が将棋の中に現れてそれで強くなるんだということをずーっと言ってきましたが、羽生先生はそういうことは言わないですね。将棋が強くなるのは、そういうこととは別な次元だということで悠々と七つのタイトルを取っている。ああいうふうなものがおそらく35歳以下を、もっともっと彼は若いですけれども、代表する人間でないかというふうに思います。

対自然の姿勢でもそういうことがあるように思いますね。55歳以上は昔はこうだった、昔はよく山に行ったもんだと、こういう話が出ます。それ以下は昔も今も何もない。ただもう戦後の非常に有難い民主教育で育てられて、私らから見ればうらやましいわけです。結果としてはやっぱり55歳以下と55歳以上は違うと。55歳という線が正しいかどうか、これば別としまして、その辺ですね。そういうことで対自然の姿勢も確かに違っていますから、日本人と一括して言ってはならないと、こういう感じがいたします。

ヨーロッパの中でも自然観は異なる

ですから同じ日本人でも対自然の姿勢が違うと同じように、そのことを反映しまして、アンケート調査をやりましても、回答が違ってまいります。これは日本だけでなくて、ヨーロッパでもおそらく同じだろうと思います。あとの修験道の問題とも関連しまして、大事なことですけれども、今までヨーロッパというのは一口で言っていました。たとえばヨーロッパはキリスト教国だからということで一括してばっと言ってしまうわけです。そうすると聞いているほうもまあそんなもんやなと、こう思うわけですね。しかし、ほんまにそうやろかということをじっと考えて、いやじっと考えなくても、アンケート調査かなんかから見ますと、決して一様にこのキリスト教国という言葉で

くくれるものではないということが、はっきりしてきてまいります。樺山紘一さんも、ヨーロッパの人間すべてがキリスト教信奉者であった時はないんだということを言っております。宗教学者はどんどん研究なされて、そういうことをおっしゃる。これも真理ですけれども、私どもが先程言いました調査をした際の、調査の結果からそういうことを実感として得ておるわけです。これはいろんなところで発表しておりまして、先達て、第一プランニングセンターから出された、「明治神宮の森」のところにもちょこっと書かせてもらったんですが、非常に面白い結果が出ていますので、ご紹介したいと思います。

というのは、こういうことですね。あなたは山川草木に、山川草木というと、すぐ乃木大将なんて出てくるのは55歳以上とか（笑）、その辺の年齢ですけれども、要するに自然物ですね。山川草木に、自然物に、山や川や草や木に霊が宿っているような気持ちになったことがありますかという質問をしておるわけです。霊というのは霊魂の霊ですね。こういう質問をした内心はどういうことかといえば、おそらくヨーロッパの人はそんなことは言わないだろうと、特にドイツ人というのはもう合理的な思考で固められた民族ですから、そういうことはほとんどの人が否定をするだろうという気持ちがありました。というのは、先程申し上げましたヨーロッパの人間はキリスト教国だからということに眩惑されているのと、それからもう一つ日本人はそういう霊的な存在に対して、特別に感受性の鋭い民族だという思い込みがありましたからですね。両方の思い込みがあって、日本人は高く霊を肯定するし、ヨーロッパ人、特にドイツ人はほとんど肯定しないだろうといことでやったんですが、これがあにはからんやという結果でありますね。やった対象はドイツ人では四カ所です。この結果は報告書にすでに出しておりますので詳しいことは申し上げませんが、ドイツ人、それからフランス人、それからフィンランド人を対象にしたわけです。なんでフィンランドをやったかということは、これは初めドイツと日本の比較をやりましたら、みんなに馬鹿にされまして、ドイツみたいな森林の少ないところと、日本のように多いところと比較して、そんなものがなんの足しになるかと言われて、そんなら森林の多いところを一つ入れようということでフィンランドを入れたわけで、非常に単純な動機なわけです。あとから理屈をつけてフィンランドはなんとかかんとかと言っていますけれども、実は非常に単純な動機で、フィンランドを入れました。

その結果は、なんとドイツ人の40数％というものが、４カ所の土地で40数％の人が霊を感じたことがあるというわけですよ。本当に信じがたいですね。中にはドイツ人らしく、律儀に山川草木にいるのは、あれは霊でなくて生命だというようなことをドイツ語で書いてくる。もちろんドイツ語で書くんだけれども、ドイツ人ですからあたりまえですけれども、そういう回答がありました。大体そういうことは一部のドイツ人は律儀に考えますけれども、一般の市民としては40数％が霊を肯定している。肯定ということじゃないんですね、感じたことがあるというわけです。フランスとフィンランドでは60何％、これが霊を感じています。日本ではそれじゃもっと上かというとそうではないんですね。一番上の連中が鶴岡。私は今日山形の鶴岡から来ているのですが、鶴岡の人は非常に信心深くて、というのは出羽三山がいらっしゃるんで、うかつなことを言うと罰が当たるかも

しれない（笑）。そういうこともあるかもしれませんが、鶴岡は60何％が肯定しています。逆に一番低いのは東京都でして、20数％しかないわけです。世界中を調べたわけではないんですが、東京の人が一番そういうことについて信じないといいますか、感受性というか、なんといいますか、頭の中でもう冷めたといいますか、そういう考え方を持っているというふうなことがわかりました。

そうすると、今まで組み立ててきた日本人のこの三つの自然観の特徴というものを構成し直さなければならないと、こういうふうなことになってきたわけです。それで実際に失われたものは何かということをもう一回見つめ直して、それを回復するということがこれからの課題ではないかというふうに思い直したわけです。

アンケート結果から見る日欧の森林観――人生観が根本的に違う

なお、ご参考までに、これはもうご覧になった方が多いと思いますけれども、若干アンケート調査をやりました結果をご紹介しますと、森林の中を散歩するのが好きですかという、そういう質問を出しているわけですね。そうするとドイツでは怒られましてですね、どうしてこういう馬鹿なことを聞くんだというわけですね。そんなことは聞かなくてもあたりまえじゃないかと、もうあなたは男性に対して女性が好きですかとか、女性に対して男性が好きですかというのと同じような馬鹿げた質問だと。こういうことをやるからにはあなた方もう一つ裏があるんじゃないかというようなことを言われてですね。ドイツ人の答えは、フランス人も、フィンランド人もそうですけれども、100％近くが好きだと言いますね。好きだというのは、歩いているから好きだという、ここのところが違うわけですね。日本でも60％あまりは好きだと言っていますけれども、歩いているかというと、これは全然話が違うわけですね。それは好きだというのが正解だから、だから皆さん好きだと答えてくれるわけでして、つまり歩いているから好きだというんではなくて、この質問の中で見ると好きだというほうが正しいんだと、こういう回答でありますので、アンケート調査というのは、非常に疑ってかからなければならない。ジャーナリストの皆さんを前にして、こんなことを言うのはあほな話ですけれども、アンケート調査というのは、どっち向けでも使えるという非常に危険なところがあります。答えはこう出ているけれども、本心はこうやでということを言うと、聞いているほうでそうかいなと思うような答えが含まれていましてですね、こういうアンケート一般の問題点というのはありますけれども、それは置きまして、とにかく日本人とヨーロッパ人では散歩というものに対する考え方が違う。

もう一つ面白いのはあなたが旅行するとしたらどこに行きたいですかという質問ですね。これはもうヨーロッパの連中、ドイツの連中は60％までが森林に行きたいというわけですね。森林に行きたいというのは日本人では考えられないですね。日本で同じ質問をしますと、数％は森林に行きたいと答えを書いてくれますけれども、これは質問者の意向を汲んでくれたんじゃないかと思います。つまり日本で旅行先として森林を選ぶという、そういう人が数％もいるということはちょっと考えられないんではないか。情けないことですけれども、日本人の生活実態からいえば、旅行先に選ぶ

時はもっと違うところですね、温泉とか、名所旧跡、そういうようなところになると思いますが、ドイツ人は森林に行きたいと、こういうことですね。

フィンランド人はどこに行きたいか、湖にいきたいというのがまた60％ぐらいあります。考えてみると、もうフィンランドは湖がうじゃうじゃありまして、2、3歩あるいたら湖に落ちるぐらい湖があります。何万というか、数え方がわかりませんので、人によって違うんですけれども、人によっては18万もあるというんですから、本当の数はわかりません。とにかく国土の9％が湖です。そこへ行きたいと。

なぜ行きたいか、この動機が私は問題だと思うんですね。この動機はどうかというと、日常生活の中で、自分が一番楽しいと思える場所に、そういう場所だから行きたいんだというわけです。ドイツ人は森林に行くことが何より楽しみだから行きたいんだと。フィンランド人は湖に行くということが、何よりの楽しみだから行きたいんだと、こういうふうな答えでありまして、日本人の答え方はまるっきり逆ですね。日常の煩わしい生活から離れてたまには温泉に行きたい、たまには十和田湖のような観光地に行ってのんびりしたい。そういうことが願望として現れておるわけです。ですからこれは人生観の問題でありますね。森林を対象にしていながら、人間の生き方の問題だというふうに私は思いました。これからこの問題をどんどん深めていくということも可能なわけですが、いかんせん私はもうそれだけの力がありませんので、それはもうやらないですけれども、人生観そのものがもう根本的に違うということを感じたわけです。

観念の自然とつき合っている限り林業の振興はない

もう一つ、専門の方々も皆さんお感じになっていることが多いと思いますが、全くわからん人があまりにもいろいろなことを、わかったようなことをおっしゃり過ぎるというのが日本の弊害といいますか、通弊といいますか、そういう感じを受けているわけです。というのはつまり自然離れを起こしているから、日本人は現実の自然じゃなくて、これも盛んに強調しているんですけれども、現実の自然を対象にしてものを考えるんじゃなくて、観念の自然、頭の中に構築された自然を対象にしてものを考えるという風習ができあがりましたですね。自然を愛しましょう、自然を大事にしましょう、それで自然を守りましょう。こういうふうなことをおっしゃるけれども、それは観念の世界における自然を対象にしておっしゃっていることが多いわけです。観念の自然というといかめしいですけれども、要するに現実の自然ではなくて、たとえばテレビの画面の自然、私は自然が好きで好きでなんて言っている人が、まあよく聞いてみたらテレビの自然番組を見ることが好きだったり（笑）、そいういうことはごく普通なわけですね。そういう方に限って結構よくわかったようなことをおっしゃる。そうするとずれてくるわけです。

杉の花粉症がおきるのはけしからん、あれは植えたやつが悪いんだなんて、そういう話がどっかから出てくる。これは観念の自然から出てくるわけでして、だから杉は植えないようにしましょうと。杉がなかったら、日本人の生活はどうなるかということまでは、ぜんぜん考えが及ばないわけ

です。割箸論もそうでした。同じようなことですけれども、そういったことがほとんど観念の自然に、結構皆さん愛着を持っていて、それについては立派なことをおっしゃるけれども、その一方で現実の自然が忘れられている。

これが現実に出て来ているのが林業の不振でありますね。もう本当に林業の振興とかなんとかいいましても、今の国民一般の認識が、現在のような観念の自然と付き合っている限りは林業に救いはないと、私は思うわけです。現実の自然はどうなっているか、林業の人が頑張って、手を加えなければどうしようもない。その手を加える金がない。今はもう本当に無茶苦茶ですね。木を伐らなければならない、手入れをしなければならない、手入れのための金がない、人がいない。主伐の時期になる、主伐をしたら、次に新植するお金がない、だから木がでない。本当に今も日本の森林は一般的に言うと、どんどん荒れているような、確かに中身は荒れていますけれども、減っているという印象ばかりが先に走っていますけれども、そうではないんでしょう。これはもうご承知のとおりですけれども、統計の結果を見ましても、蓄積は増えているし、面積すらなんぼか増えているという状況で、それは今のような現実に林業という生業ができないというところに問題があるんでしょう。日本の森林は資源が枯渇しているんでなくて、手入れが行き届いてないということになるんじゃないかと。この辺は、あんまり偉そうなことを言いますと、今日は論争を吹っ掛けられる心配はないかもしれませんが、あの林政の専門の連中に言わせると、口角泡を飛ばして、お前はなんじゃ、なにあほなことを言うかとやられるわけですから、ま、この辺でとめますけれども……。

日本人ほど人工林を好む民族はいない

そんなわけで日本人の考え方というのは本当に虚構の世界に対して向けられて、そのせいなのか日本人ほど整然たる林相を好む人種はいませんね。人種というとおかしいですが、このような民族はいません。これは手を換え、品を換え質問し得られた結果です。これは本当に正しい推論だと私は思うんです。というのは、たとえば一対比較法でAとBの写真のどっちが好きですかということを聞くわけですね。これには正解はないわけです。先程のように散歩をするのが好きですかと、これは好きと書かんといかんなということでみな書くわけですけれども、AとBとどちらが好きですかと、こう聞かれると何が正しいかわからないから、やっぱり自分の思ったとおり書くということです。それをトータルしますと、日本人が一番人工的なものを好みます。整然たる林相を好みます。ですから日本人が一番好きなのは、たとえば魚梁瀬の杉林とか、木曽の檜林とか、ああいう針葉樹の一斉林であります。

しかし、論調はどうかというと、ちがいますよ。やっぱり。自然の林は広葉樹に限るというようなことが出てくるわけですが、それを現実に見せると針葉樹が好きだと、こういうふうなのが日本人の実態です。これは私は間違ってないと思います。あらゆる角度から見てそういうのが日本人の実感。それは森林をよく知っていてそうなのかというと、そうではありません。その整然たる人工的な森林を好むということ自体が、観念の世界での遊戯だというふうに私は思うんです。ほんまに

好きなのはなにか、こういう時、関西弁で言うほうがようわかるんですが、ほんまに好きなのは何や、というと曲がりくねった庭園の松ですね。あれは抽象的な世界だと皆さん思ってきていますけれども、私は最近考えを変えました。抽象的な世界はあの杉の一斉林の、あの亭々と聳える杉の一斉林で、現実の世界はどこにあるかというと、庭の松です。あれが日本人が一番好き。そういうふうなことであれが現実の世界だと。針葉樹の一斉林は虚構の世界の中で付き合っている自然として好きなんだと、屈折した言い方ですけれども、日本人の実態というのはそういうことでないかと，今、私は思っておるわけです。

そうしますと、これはいよいよ今のような問題点をなんとかするためにはどうしたらいいかということになるわけですけれども、これは話せばいろいろとあるわけですが、これについてはいずれ高いお金で、4,800円で（笑）、職場で買われると見ることが出来るわけですからチラチラッと覗いていただきたいんです。私はもう印税を先に貰ってしまっていますから、今から1冊2冊売れても売れなくても、あまりかわりはないんですけれども（笑）。

とにかくそういうことで日本人の考え方はとんでもない方向にきていると。そこへ虚をつくように明治の初めにドイツ林学が入ってまいりましたですね。あれが日本人の虚構の世界にぴったり合っているわけです。整然たる林相、規則正しい、訳のわからん、法正林という概念、ああいう机の上だけの概念ですね。ああいうものが日本人にむしろぴったり合いましてですね、観念的な日本人の考え方にあれが合ったわけです。それですから、国有林は安心して画一的に全国にそらやれこらやれということで、いままできたというのが実態でないでしょうか。今になって、いろいろと反省はされていますけれども、画一的な施業で来たということは間違いないところであります。

そうするとその影にあって、非常に深刻な悩みを持ったのはやっぱり私有林、民有林だったと思います。たとえば吉野の林業、北山の林業、ああいうものは本当にいろいろな苦労をしたり、工夫をしたりして今日まできています。大体、北山の林業がドイツの林学と相容れるはずがないです。考えられないわけですね、ドイツ人にとっては。これは本の中にも書いてありますけれども、ドイツ人をあそこに連れていきますと、ここの年間の成長量は幾らかと聞くわけです。そういうこっちゃないんだと言うても、そういうことでない林業があるということが、もう考えられないですね。それはドイツ人の考え方でそれを日本の国有林が真似したんで、別にドイツ人を責めるわけにはいかないんですが。

ドイツの林業は関東的、フランスは関西風

これはちょっと余計な話ですが、ドイツの森林はこの間、1990年の大風害で、年伐量の2、3倍ですか、一ぺんにやられました。それで100年間積み上げてきた整然たる施業技術を根底から覆されたというのが、1990年の大風害だったと思います。

今何が起こっているかというと、その時に本当にすこやかにニッコリ笑っていたというのはナラなんですね。今までナラはあんまりドイツ人は扱ってきていない。ナラの立派な林はありますけれ

ども、あんまりナラを中心にした施業法というのは、われわれ聞いていませんよ。なぜそうなのか、これはナラというものよりもブナとか、モミとか、ああいう耐陰性のある木、ああいうものを工夫してやっていくところにドイツ林業の神髄があったというふうに思います。ですから日本に日本の森林があり、ドイツにドイツの森林があるというのは、ドイツ人のそういう性格を現しているというふうに思うわけです。そういうふうにみますと、フランスとドイツの対比ほど面白いものはありませんね。ヤクザだと思われておったフランスのほうが、最近はちょっと値打ちが出てきたと、こういう感じがいたします。大体フランスなんて行きますと、本当に林分と林分の境目もはっきりしないし、訳のわからんところに、ドイツだったら一ぺんに伐られてしまうようなシラカンバが立ったりしています。シラカンバはドイツでは、植えないわけですね。それでフランスの森林は何々作業ということは言いません、大体。何々作業というようなことを言うと、なんか笑うというか、なんのことを言うとるんやというような顔をするらしいですね。

どういうことかといいますと、たとえばある森林を見て、これは択伐作業かというようなことを聞くと、択伐作業ってなんのこっちゃと、どういうふうに言うかしらんけれども、あんたが択伐作業と言いたかったらどうぞどうぞそうしてくださいと、うちはそんなことじゃなくてこういうやり方が森林に適していると思ってやっているだけだというようなことを言うそうです。そういう実例を私もたくさん見ています。そういうのがフランス式の考え方です。これについて思い切っていうと、ここは関東ですから。敵中におって危ないことを言うようなものですけど（笑)、大体ドイツの生き方が関東的ですね。で、フランスの生き方が私は関西的やと思うんです。日本の中に２つの国があるみたいに関東と関西は違いますから。ですから、関西の人間はまあ途中はどうでもええけれども、儲かったらええのやと、こういう言い方でいきますね。どうでっか、もうかりまっかというのが関西の生き方ですが、関東ではそうじゃない。だから会議がうるさくてしょうがないですね。関東に身を置いて、私が40年、本当に一番しんどかったのはそれだったなという感じがいたします。

新たな自然観を修験道に学ぶ

この話はちょっとおきまして、じゃどうしたらいいか。自然観が変わってきたところをもうちょっと見つめ直してみますと、一番大事なところは、一体感の失われたことではないかなというふうに思います。昔のような訳もわからず自然を科学的な対象としてすら認識してなかった時代の一体感とは違って、それをよくわきまえた上で、新たなる一体感を求めなければならないというのが今日の姿でないだろうかと、こう思うわけです。

私はそういうことを考えているうちに修験道の勉強をさせられましてね。全然勉強するつもりはなかったのですが、東京から修験道を研究している偉い宗教学者が来まして、出羽三山で対談をせよと言われ、対談の始まる30分前に初めてその人と会って、対談をしたわけです。無茶苦茶な対談をした。無茶苦茶な対談ですけれども、そのためにやっぱり若干勉強しましてですね。それで『日本文化としての森林』という本に修験道について書きました。大体ここに自然との一体感の原型が

あるんではないかというようなことを、私は今感じているわけです。じゃ皆さん修験道に入りなさいと、こういうことは言いません。みなが来られたら羽黒山も困りますしね。ただ今は非常に修行がはやっていまして、素人がやれるのは羽黒山の修験の特徴で、比叡山なんかはしかるべき修行を経た人でないと、修行をさせてもらうことすらできないんですが、羽黒はもう誰でもいいわけです。秋の峰入りというのがありまして修行ができます。

かつて鶴岡に駐在していた朝日新聞の記者の方も修行に入っていました。で、最近になりまして、今度は女性もみな入れるようになったわけです。そういうことで入れますけれども、入れとは言いません。第一私が修行する気が全然ないですから。修験道の修行というのは、私が今言いました観念的な自然と付き合うということと、まるっきり対極にありますね。大自然の中に身を置いて、大自然と接触することによって修験道の修行が成り立つ。どういう修行をするかということが、まあ難しいことが書いてありますが、要するにちょっと抽象的な言い方ですけれども、自然物すべて、たとえば樹木はもちろんですね、大きな岩、水の流れ、大気の動き、そういうふうな要するに生きものであるかないかを問わず、自然物すべてに対して、その中に生命を感じるんだと、そういうことが修験道の本質のようです。そしてその生命の持っている気を自分の中に取り込んで、これは言うなれば外なる自然を自分のうちに取り込む。そこで内なる自然を新たに生み出すと、こういうことのようです。自分の中に新たな自然を生み出す。身近なところに一体感の原型があったということに今まで気がつかなかったんです。そうかといってみんなが修行するわけにはいかないのですが、要するに自然の中に身を置くことの意味がそれではっきりしてくるんじゃないかと思います。

さまざまな宗教が共存する日本 —— 修験道の包容力に注目

非常に面白い話ですが、ヨーロッパと日本の対自然の姿勢でものすごく大きな違いは、実は宗教のあり方にあったというようなことに、最近気がつきました。というのはヨーロッパではキリスト教が入ってきまして、かつてのドレイド教をはじめ、昔の宗教を全部放逐して、山の中にはそういう神様などがおるわけない、神様というのはお一人だと、お一人というかお一方というか、要するに一神教ですから、キリスト教の神以外のものは全部否定するという立場をとりました。

ところが現実には否定し切れないでいます。キリスト教という範疇の中で、昔の神様がいろいろと顔を出すような仕掛けをしております。たとえばクリスマスというのは、もともと冬至の祭でありますし、謝肉祭の行列、あれは、あの世から出てきた、あるいは山に昔住んでいた神様が行列に加わられることだと、邪悪な冬の神様と、人間に幸いをもたらす春の神様が戦いをするんだとかいう話、それから5月の木というのを立てますね。5月のメイポールというんですか、マイバームというあれを立てる。ああいうものはみんな昔の宗教の名残でありますね。昔の宗教は認めません、認めませんけれども、キリスト教という範疇の中でそれが活躍する場をつくっております。そして何を隠そう、人間と自然との結び付きを非常にはかってくれているのがその昔の神々だというふうに私は思っているわけです。キリスト教はいくら頑張ってみてもその人の心の中に住む昔の神々を

放逐することはできない。だからドイツでさえ40数%が霊を感じるという結果になって出て来ているわけです。一神教の取ったやり方はそういうことで、神々を放逐したんですが、別の形で生かしている、これがヨーロッパの生き方です。

それに対して日本の場合はそういうことはやりませんでした。非常に曖昧というか、包容力があるというか、仏教が渡ってきてから神様との融合をはかるためにいろいろと考えましたですね。たとえば最初は神仏混交、神様もまた仏様を拝んでいるんだと、仏様の信者だというような話から始まって、実は現在の神様は、これは私が偉そうなことを言う資格はないんですけれども、現在の神様はもと仏様だと。本地仏、本地垂迹説というのがまあ私も聞いた覚えがあるんですが、神様のもとは仏様であって、人間を救うために仮に姿を現しているのが現在の神様であると。それで権現というんだそうです。本当になんか宗教のようで、これはいよいよ山伏の講釈みたいになってきましたが（笑）、権というのは仮のという意味です。権というのはなんか私どもは非常に権威のあるもののような印象を受けていますが、実は仮のという意味だそうでして、仏様が仮に姿を現している。で、月山の本地仏は阿彌陀如来、それから羽黒山の、出羽三山の一つですね、羽黒山の本地仏は観音様、それから湯殿山、出羽三山のもう一つの山、湯殿山の本地仏は大日如来だそうです。

ということで、顕教と密教が両方混合しているという状態ですけれども、これをキリスト教が入ってきたと同じように明治維新の時に、廃仏毀釈で捨てましたですね、1回。それで羽黒山でも、参道沿いにあったたくさんの仏様を全部谷底へ、蹴落としたというか、蹴ったかどうしたか知りませんけれども、とにかく谷底に突き落とした、そういうことをやっております。羽黒山の修験道にとっては迷惑な話で、それから神道に衣替えせざるをえなかったというわけです。庄内地方のお寺に参拝しますと、突然訳のわからんところに大黒様がいらっしゃったりするわけです。これはなんだと言ったら、大黒様を置くことによってここはお寺でなくて、神様を祭っていますということをお上の人に見せるためだったと、こういうふうなことですね。非常に苦心惨憺して今まで修験道の道をつないできたという一つの例で、これを話すとまたきりがないですから、このぐらいにしますけれども、それで今日まできている。しかし、戦後になってから国家神道の枠が取れましたから、いろいろな宗教が自由自在に行き来できると、こういうことになりました。

日本人の宗教人口をトータルしますと、1億数千万になるそうです。辻褄が合わないというのは、ヨーロッパ人が考えることですね、日本では辻褄が合ってます。これはともに仏様を拝み、神様を拝み、そういうことが可能だから、私なんかどこに行っても拝みますから、キリスト様でも、仏様でも（笑）、本当になんか拝まないとちょっと罰が当たりそうな気がして。こういうふうなのが日本人の宗教ですね。それを宗教学者に私は、これは一体どう解釈したらいいんだとただしますと、宗教学者もそれでいいと言いますね。なぜかというと、日本人の宗教はある仏とか、ある神とか、特定のものを立てない。そのものだけを立てないというのが特徴ですから、こういうことで非常に私も安心いたしましてですね、今、修験道のことを包容力があるというような感じで受け取っておるわけです。

できる限り自然と接触することがこれからの課題

自然との一体感の原型は修験道にありますけれども、そういう修行をせよというんではない、何回も言いますけれども、その代わりにできる限り自然と接触するという、そういう機会をつくっていくということがこれからの課題ではないか。そうすると55歳以上はすぐ昔の話を出します。ところが同じ道を通って昔には帰れません。仮に菅原聡説を取ったとしまして、次の35歳から55歳は、お前ら子供を指導せよと、こういうようなことを言ったってどうしていいかわからないですね。それから35歳以下は新たな世界を求めつつある。そうするとやっぱり中間の世代並びにそれに続く世代のために、われわれは新たな道を構築しなければならない。これを考えなければどうしようもないところにきているんではないか。その点で55歳以上は怠慢だというふうに思います。昔は木登りをよくしたもんだとか、そういうことでは事は片づかないですね。昔はそれでいいですけれども、今はそうじゃないです。木登りしようと言ったら、木に登っていかなる効果があるか、こういう話になるわけですね。今は森林浴だなんて言って、森林の中を歩くと、健康にいいからとか、こういうふうな講釈しないと行かないわけですね。そういうことはどうでもよかったはずなんですね。それが今そうなっていますから、じゃそれに相応しいような新しい道を構築しなければならない。これが今の状況であろうと思います。その時には、少年自然の家とか、青年の家とか、ああいうものも役に立つだろうと。森林インストラクターも役に立つだろうと。中間の層は農家民宿もいいんではないか、グリーンツーリズムもいいんでないか、いろいろいい方法は考えられますけれども、具体的にどうするかということは、やっぱりあらゆる場面で日本人がこういう国民性だということをわきまえてやらなければ、とんでもない見当違いになるんではないかということです。

私は時間があれば、山形の草木塔の宣伝をして帰ろうと思ったんですが、もう時間がありませんから、草木塔の話は省略いたします。ああいうものを見ますと、なかなかいいことをやってきたなという感じはあります。ただ、どれだけの哲学を持ってそういうことをおやりになったかはわかりませんけれども、まあとにかくそこに昔の対自然の姿勢が具体的な形で出て来ておったように思います。

要するに、一体感の回復ということが今の焦点ですということを再度申し上げて話を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

住宅建築と国産木材の消費拡大

戸谷英世・住宅生産性研究会副理事長

建設省出身で、輸入住宅に詳しい立場から、日本の住宅産業の問題点について解説していただきました（平成７年８月25日講演）。

現在、日本が抱える大きな課題の一つが住宅問題です。政府は、バブル経済がはじけた時、日本経済の景気浮揚策として、住宅政策を推進しました。住宅金融の緩和、住宅取得税減税などで「年収の５倍で家が買える」と、政府の宣伝に乗って年間160万戸というバブル期にも経験しなかった数の住宅が建設されました。当時は住宅投資を盛んにすることで景気の波及効果が高まると、住宅価格を下げるよりも、むしろ高い方が経済波及効果が高くなるとさえ思われていました。ところが、給与の方は思ったように上がらず、ローン返済不能が目に見えてきました。そこでようやく住宅コストを下げる動きが生まれ、輸入住宅がその切り札として推奨されました。

そこで問題視されたのが、日米の住宅価格差です。価格的には輸入住宅の建材費は30％。例えば2,000万円の家は600万円に過ぎない。つまり日本の住宅は設計費が高いという、建材部門以外に問題があります。日本では設計費が住宅費の12％も占めています。日本の住宅産業こそ体質改善が必要です。

消費者がいかに貢献するのか、どういうものを欲しがっているのかを、考えていません。輸入住宅は本来、安く住宅をつくるシステムの輸入という意味をもちます。外材の建材を輸入して作ることをイメージしますが、それは誤りです。日本でも、生産性の高い「和製ツーバイフォー」を開発しなければなりません。消費者本位の住宅を提供することが求められます。そのためにも輸入住宅の「安く作るシステム」を学ぶ時です。

熱帯林とＩＴＴＯについて

鈴木庸一・外務省国際機関第一課長

94年にITTO理事会の議長を務め、83年協定の改定交渉を手がけた立場から、その過程を解説していただきました（平成７年11月28日講演）。

83年協定とは、70年代の価格安定を目的とした伝統的な商品協定を改め、一次産品の需給動向について市場の見通しをより確実にする目的で発足しました。熱帯木材の市場開拓と技術協力が目的で、当初はそれ程環境保護を念頭に置いたものではありませんでした。

その後、熱帯木材貿易が環境破壊につながるという声が欧州のNGO等で高まり、環境問題についての政策目標を打ち出したのが90年の理事会で決定した2000年目標でした。それは「2000年までに国際貿易で出てくる熱帯木材の全ては、持続的経営のされている森林から伐採されたものに限る」というものでありました。

83年協定は7年間の協定で、タイムリミットの94年3月に向け、予備交渉からもめることになりました。「緑の党」の働きかけで、オーストリアで熱帯木材にラベルを貼る法律が92年9月に成立し、これにマレーシア、インドネシアが反対するなど、消費国と生産国の対立が始まっていました。

交渉過程で生産国は、UNCEDの森林原則に盛り込まれた持続的経営の達成のために、①先進国は新たな財源を提供することを協定に書き込むこと、②熱帯林だけでなく温・寒帯林についても協定の対象とせよ ―― と要求。これに対し、消費国側は、いずれについても難色を示しました。

しかし、消費国の譲歩により、①2000年目標達成のため、新たな基金を造成する②温・寒帯林の経営についても持続的か調査する ―― ことで妥協しました。わが国はITTOの本部を抱え、最大の熱帯木材の輸入国及びITTOへの最大の資金拠出国として、これらの問題解決に大きな役割を果たしました。

主な生産国は妥協に応じたものの、ブラジルはITTOから得るものはないとして、未だ新たな協定には参加しないと表明しています。

今年3月に開催する締約国会議で、新協定が発効する見通しです。今後の課題は、①熱帯木材貿易の振興という本来の目的を失わず、環境問題を解決すること（2000年目標が達成出来るのはインドネシア、マレーシア、ガーナ等の一部の生産国のみ）、②資金需要は2000年までに毎年22億ドルが必要、③ワシントン条約でマホガニーの取引制限の議論が行われているが、こういった環境保護の観点からの貿易制限との調整をどう図っていくか、大きな課題が山積みされています。